# あこがれの巨人と治勲少年

長房囲碁同好会　赤石五郎

　趙治勲は６歳の時に、兄に連れられて来日した。兄は弟を超一流の棋士にしようと連れてきたのであろう。そして、当時強豪の揃っていた木谷門に入門を許された。そして、四谷にある木谷家には、家も近い呉清源が時々顔を見せていたらしい。

　きっと、礼子さんにも、「聞きたいことがあったら何でも聞いてごらんなさい」と知恵をつけられたのであろう。治勲少年は、「あこがれの巨人」であったろう呉清源に訊いてみた。「強くなるにはどうしたらいいのですか」と。「なんでもいいから碁盤の前に一日 10 時間は座ってみなさい」と呉先生は答えてくれた。天才呉にして、それだけの努力をしていたのである。呉の天才ぶりはよく言われているが、その努力についてはあまり話題に取り上げられていないようである。呉は左手でよく石を置いていたが、左利きではない。右手で石を置き疲れると、今度は左手で石を置いていたのである。

**趙治勲名誉名人**

　昭和 48 年呉清源全集(全四巻）が、平凡社から発行されると、趙は早速買い求め、全局３回から４回は並べた。呉の全盛期の好局が載っている第三巻はボロボロに傷んだのでまた買い求めたといわれる。

　趙は、8 歳の時に呉清源先生から言われた言葉を忠実に守ったのでありましょう。だからこそ、後に日本囲碁界において大成し、それが韓国では英雄として報道され、後の韓国の囲碁熱を高める原動力ともなったのでありましょう。弟の才能を信じて日本に連れてきた兄も偉いが、本人が日本でどれだけ苦労したかを考えると、何か心が打たれる。